

長恨歌（～一六句）書かし文 口語訳

赤シートを使って暗記・確認用に利用してください。

外縁線は 番号漢字・表現 重要句形 文法上の連続 を表す

漢の皇帝は女を大いに好んで國を傾けるほどの美女を得たいと思つた

かたいいじる おむ なへじく おも
漢皇色を重んじて傾國を思ふ

楊氏の家に娘がいてよりやく年頃になつた

よつけ むすめ おは あようせこ
楊家に女有り初めて長成す

生まれつきの美しさはそのまま捨てておかれるわけもなく

天生の麗質は自づから棄て難く

瞳をぐるりと動かしてひとたび微笑むと限りない魅力が生まれ

眸を廻らして一笑すれば百媚生じ

春まだ寒い頃華清宮の温泉で入浴のお許しを頂いた

はるさむ ゆく たま かせい ち
春寒くして浴を賜ふ華清の池

侍女がたすけ起こすとなまめかしく自分の体を支える力もない

侍女扶け起こすに嬌として力無し

雲のよつに豊かな髪 花のよつに美しい顔 金の髪飾り

春の夜の短さを嘆きつつ、日も高くなつて起きる

春宵短きを苦しみ日高くして起く

皇帝の氣に入るよつに宴席にはべり 片時の暇もなく

歓びを承け宴に侍して閑暇無く

後宮の美女は三千人

黄金づくらの御殿で化粧をひらじてあでやかに夜宴にはべり

きんおくよそおな きより さむせんにん
金屋粧ひ成りて嬌として夜に侍し

姉妹兄弟はみな領地を与えられて諸侯となる

しまいていけいみなぐく つら
姉妹弟兄皆土を列ぬ

かくして天下の父母の心をして

つひ てんか ふば いじる
遂に天下の父母の心をして

読解に際して注意すべき点等

・原則として読みは全て暗唱する。歴史的仮名遣いにも注意。「醉」の古語は「酔ふ」。しかも読み仮名は「ゑふ」。

・「傾國」の意味は「(国を傾けるほどの)美女」。同義語は「傾城」。

・「可憐」は感嘆。「ああ。」「憐れに思つべきだ」とか訳さないことに。

・AをしてBしむ」は使役。「AにBさせる」。A=B「天下の父母の心」、B=「男を産むよつ女を産むよつがよ」と思つ。しかも句をまたいで再読なので要注意。

・あと押韻と対句も押さえてく。

在位の間長年求め続けたが得られなかつた
御宇多年求むれども得ず

奥深い部屋で養育されていて世間の人はまだ知らなかつた
やしな しんけい あ ひとごと
養はれて深閨に在り人未だ識らず

ある口選はれて皇帝のおそばにお仕えすることになった
いっこうえら くそおつ かたは あ

一朝選ばれて君王の側らに在り
後宮の美人たちも見ぶりがする

りくきゅう ふんたいかおいろな
六宮の粉熏顔色無し

温泉の湯水は滑らかで白く柔らかく潤いのある肌に注ぎかかる
おんせんみずなめ

いよいよ初めて天子の寵愛を受ける時がきたのだ
はじ こ あら おんたく う とき

始めて是れ新たに恩沢を承くる時
はすの花のとぼりの中は暖かく 春の夜を過ぐ

芙蓉の帳暖かにして凝脂を洗ふ
ふよう とぼりあたたか さよいりし

この口から皇帝は朝の政務をしない
これより君王は早朝せず

春は春の遊びの供をし 夜には夜を独り占めにする
はる はる あそ したが

春は春の遊びに従ひ夜は夜を専らにす
三千人分の寵愛が一人に集まつた

さんせん ちよつあいじつた あ
三千の寵愛一身に在り

玉づくりの楼では宴が終わり酔つた姿が春の雰囲気(につけこむ)

玉樓宴寵みて酔ひて春に和す
ああ 楊氏一門にまばゆい光が生じてゐる

あわ こいつこ もんこ じょうう
憐れむべし光彩の門戸に生ずるを

男を産むより女を産んだ方がよいという思いを抱かせた
きとこ つ あわ きとこ おも
男を生むを重んぜず 女を生むを重んぜしむ

慌てて作ったのでミスが含まれてこると思われますが」「承くだされ。

長恨歌（第二部）一七句（五四句）▽書き下し文◆口語訳

Ver.3

赤シートを使って暗記・確認用に利用して下さい。

※各縦線は 重要漢字・表現 重要 句形 を表す※

驪山にある離宮の高いところは青雲の中に入り、

りきゅうたか といろせいうん い

驪宮 高き処 青雲に入り

ゆつたりとしたリズムの歌や舞 管弦はゆるやかに演奏されて、

かんかまんぶしちく こ

緩歌漫舞糸竹を凝らし

漁陽の攻め太鼓の音が大地を振動させて届いてきて、

ぎょようおう へいこち どよわ

漁陽の鼙鼓地を動して来たり

天子の宮城には戦火によつて煙や塵がまさおゝり、

きゅううらう じよげつえんぢんしよう

九重の城闕烟塵生じ

翡翠の羽根で飾つた天子の御旗はゆづゆづと揺れ動き、進んではまた止まる

するかようよつ じよげつえんぢんしよう

翠華搖搖として行きて復た止まぬ

天子の軍隊は出発しようとせず、どうする」ともできない

りくくんはつ いかん な

六軍發せず奈何ともする無く

螺鈿細工の花の首飾りは地に捨てられたまま誰も拾う者がなく、

かでん ち す ひと おさ な

花錦は地に委てられて人の収むる無く

こうあいさんまんかぜしようさく

黄埃散漫風蕭索

峨峨山のふもとは道行く人もほとんじなく、

がびさんかひと ゆ

峨嵋山下人の行くゝと少に

蜀の地を流れる川の水は緑色に澄んで、蜀の地にそびえる山は青く連なり、

しょうこう みずみどり しゃくわん あお

蜀江は水碧に蜀山は青く、

仮の宮殿で月を見ると、その色に胸をしめつけられ、

あんぐう つき み しょうしん いろ

行宮に月を見れば傷心の色

天下の情勢が大きく変わり、天子は都へ戻られることになった

てんめぐ ひでん りゆうぎよ めぐ

天旋り日転じて龍馭を廻らす

ばかりは したでいど なか

馬嵬坡の坂のあたり、泥の中に

馬嵬坡の下泥土の中

※ 読解に際して注意すべき点等※

・原則として読みは全て暗唱する。歴史的仮名遣いにも注意。

・「同一物を示す表現」をしつかりおさえる。例えば「蛾眉」も「玉顔」も共に「楊貴妃」の意。

・「奈何」は「いかん」で方法、手段。「何奈（いかん）」は状態。「不能A」は不可能。「Aする」とができない。読み「あたはず」。

※慌てて作ったのでミスを含むものと思われますが了承ください。

素晴らしい音楽が風に乗つてあちこちから聞こえてくる

せんがくかぜ ひるがへ しょしょ き

仙樂風に飄りて処處に聞こゆ

じんじくくんおうみ あ

尽日君王看れども足かず

霓裳羽衣の曲を驚かし打ち碎いた

きょうは げいしよううい きよく

驚破す霓裳羽衣の曲

せんじょうばん きせいなん ゆ

千乗万騎西南に行く

長安の都の門を出て西へ百余里の所（の馬嵬に着いた）

せんじょうばん きせいなん ゆ

西のかた都門を出ぐる」と百余里

すんなりした美しい眉の人は馬の前で死んでいった

ゑんてん とわん がびばぜん し

宛転たる蛾眉馬前に死す

翡翠の羽の髪飾りも雀の形の金のかんざしも玉製の簪も

すいぎょくきんじやくぎょくそうとう

翠翫金雀玉搔頭

振り返つて見つめる顔には、血と涙が入り混じり流れた

かへ み けつるいあひわ なが

廻り看て血涙相和して流る

高く雲に入る棧道は曲がりくねり劍閣山を登つていく

うんさんえい うけんかく のぼ

雲棧縈糾劍閣に登る

天子の所在を示す旗に輝きなく、太陽の光までが薄れいた

せいきひかりな にっしょへうす

旌旗光無く日色薄し

天子は朝な夕なに楊貴妃のことを思つ

せいしゅちようちょうぼう じょう

聖主朝朝暮暮の情

夜の雨に鈴の音を聞くと、腸を断ち切られる思いがする

やう すず き ちようだん こえ

夜雨に鈴を聞けば腸断の声

こゝ馬嵬まで来ると心ひかれてためらい、立ち去れない

こゝいた ちゅうわよ さ あた

此に到り躊躇して去る能はず

美しい顔は見えず、死んだ場所だけが空しく残っている

ぎょくがん み むな し ところ

玉顔を見ず空しく死せし処

長恨歌（第二部=五十五句～七四句） 曲名トし文 口語訳

Ver.1

赤シートを使って暗記・確認用に利用して下さい。
外縁線は 番号漢字・表現 重要 句形 を表す

太子と臣下は互いに（死に場所を）顧みて みな涙で衣を濡らし

東方の都の門を望み 馬の歩みに任せて帰る

くみんあひかへり ひがし ともん のぞ うま まか
君臣相顧みて ひたむけ じゆわ うみは

帰つてくると池も庭もみな昔のままである

太液池のはすの花 未央宮の柳

かへりき ふようびおう やなぎ
帰り来たれば池苑皆旧に依る

はすの花は（楊貴妃の）顔のよつで、柳の葉は眉のよつである

春風が吹き桃とすももの花が開く夜

ふよう おもて やなぎ まゆ
芙蓉は面の」とく 柳は眉の「とく

春風が吹き桃とすももの花が開く夜

しゃんなんといつ はなるひ よゆ
春風桃李花開く夜

かつて梨園にいた歌舞入たちは白髪が目立つよつになり

梨園の弟子白髪新たに

夜の宮殿に童が飛び わびしく物思いにふけり

せきでん ほたると も ショウゼン
夕殿に童飛びて思ひ悄然

遅々として進まない鐘鼓に 初めて夜が長く感じられる

ちち じょうじはなじ なが
遅遅たる鐘鼓初めて長き夜

おしどりの形の瓦は冷ややかで 霜が重く降りていて

ゑんおつ かばらひ そつかおわ
鶯鶯の瓦冷ややかにして 霜華重く

遙か遠く隔てられた生と死 別れから幾年がが過ぎた

ゆうかいつ せこしづか
悠悠たる生死別れて年を経たり

讀解に際して注意すべき箇等

・「尽く」は「じぶんじぶん」で「全て・残らず」。

・「如何不A」は反語「いかんぞA(セ)やうん」で「Aではない」とあるのがいや、Aしないではござれな」。

・「新たに」は「最近になつて急に」の意「悄然」は「わびしく様」を表す。

・「未A」は再説文字で「いまだA(セ)ず」「まだAしない・できない」。じじだま つまでも眠れない、の意

・「曾A」は「かつてAす」で「今までにAした(こと)がある」。打消の「不」を伴つてこらか「今まで一度もAしない」。

慌てて作ったのドリースを念むものと思われますがア承ぐださ。

太子と臣下は互いに（死に場所を）顧みて みな涙で衣を濡らし 東方の都の門を望み 馬の歩みに任せて帰る

くみんあひかへり ひがし ともん のぞ うま まか
君臣相顧みて ひたむけ じゆわ うみは

帰つてくると池も庭もみな昔のままである

太液池のはすの花 未央宮の柳

かへりき ふようびおう やなぎ
帰り来たれば池苑皆旧に依る

はすの花は（楊貴妃の）顔のよつで、柳の葉は眉のよつである

春風が吹き桃とすももの花が開く夜

しゃんなんといつ はなるひ よゆ
春風桃李花開く夜

かつて梨園にいた歌舞入たちは白髪が目立つよつになり

梨園の弟子白髪新たに

夜の宮殿に童が飛び わびしく物思いにふけり

せきでん ほたると も ショウゼン
夕殿に童飛びて思ひ悄然

遅々として進まない鐘鼓に 初めて夜が長く感じられる

ちち じょうじはなじ なが
遅遅たる鐘鼓初めて長き夜

おしどりの形の瓦は冷ややかで 霜が重く降りていて

ゑんおつ かばらひ そつかおわ
鶯鶯の瓦冷ややかにして 霜華重く

遙か遠く隔てられた生と死 別れから幾年がが過ぎた

ゆうかいつ せこしづか
悠悠たる生死別れて年を経たり

讀解に際して注意すべき箇等

・「尽く」は「じぶんじぶん」で「全て・残らず」。

・「如何不A」は反語「いかんぞA(セ)やうん」で「Aではない」とあるのがいや、Aしないではござれな」。

・「新たに」は「最近になつて急に」の意「悄然」は「わびしく様」を表す。

・「未A」は再説文字で「いまだA(セ)ず」「まだAしない・できない」。じじだま つまでも眠れない、の意

・「曾A」は「かつてAす」で「今までにAした(こと)がある」。打消の「不」を伴つてこらか「今まで一度もAしない」。

慌てて作ったのドリースを念むものと思われますがア承ぐださ。

赤シートを使って暗記・確認用に利用して下さい。

※各桟線は 重要漢字・表現 重要 句形 を表す※

臨邛の道士で長安に旅人として来ている者があつた

りんきょう どうし こうと かく
臨邛の道士鴻都の客

（道士は）天子の夜も寝られず楊貴妃を想つ心に感じ入つて

くんおうてんと おも かん ため
君王展転の思ひに感ずるが為に

大空を押し開き大気に乗つてかける様子は稻妻のようで

くう はい き ぎよ はし いなづま
空を排し気を馭して奔る」と電の」とく

上は天上をぐまなく探し下は地下を探し尽くしたが

うへ へきらく きは した こうせん
上は碧落を窮め下は黄泉

その時突然こんなことを聞いた、海上に仙人の山があり

たちまき かいじょう せんざんあ
忽ち聞く海上に仙山有り

樓閣は透明に輝いて五色の美しい雲がわき起こり

ろうかく れいろう こううお
樓閣は玲瓏として五雲起こり

その中に一人字を玉眞という者がいる

なか いちにんあ あさな ぎょくしん
中に一人有り字は玉眞

黄金の宮殿の西側の御殿に至り、玉製の扉を叩き

きんけつ せいしよう ぎょくけい たた
金闕の西廂に玉局を叩き

聞くところによると、漢の天子の使いであるといふ

きくなら かんかでんし つか
聞道く漢家天子の使ひなりと

衣を取り、枕を押しやり、立ち上がって部屋の中を行き来し

ころも と まくら お た はいかい
衣を攬り枕を推し起ちて徘徊し

豊かな髪は半ば垂れ下がりたつた今眠りから覚めた様子で

うんびんなか た あら ねむ
雲鬟半ば垂れて新たに睡りより覚め

風が仙女の袂を吹き上げてひらひらとひるがえり

かぜ せんべい ふ ひょうよう
風は仙袂を吹きて飄颻として挙がり

※ 読解に際して注意すべき点等※

・「能」は副詞「よく」動詞「あたら」で共に可能、「~することができる」。「致す」は「呼び寄せる」の意で同系は「誘致」など。

・『之を求むる』の『之』はと何か、詩中より漢字二字で抜き出せとか。探したのは魂だから「魂魄」を抜き出す。

・「AをしてBしむ」は使役。「AにBさせる」。基本。「遂に」は「すぐに」、「忽ち」は「突然」、「新たに」は「たつた今~したばかり」。

・「猶ほ」は比況で「まるで~のようだ」。「如(ご)とし」を伴うことも単独で用いることも。また「如」単独の場合もある。(七九句)

・その他、形容詞は本番で脚注が期待できなくもないが、できればひと通り暗記しておきたい。

真心を込めた念力を使つて魂を呼び寄せることができるという

よ せいせい も こんぱく いた
すぐさま方士に（楊貴妃の魂を）工寧に求めさせた

ひ ほうし いんぎん もと
遂に方士をして殷勤に覗めしむ

ひょうし ほうし いんぎん もと
天に昇り地に入りて之を求むること遍し

どちらも果てしなく広がつて、楊貴妃の魂はどこにも見えない

てん のぼ ち い これ もと
天に昇り地に入りて之を求むること遍し

りょうしおぼうぼう みなみ
両処茫茫として皆見えず

やま きよむ ひよびよう かん あ
山は何もない遠くぼんやりした空間にあると

そ なかしゃくやく せんしおお
其の中綽約として仙子多し

ゆき はだへはな かんばせしん
雪のようない肌、花のようない顔、ほとんどの楊貴妃そのものである

きゅう かちようり むちゅうおどろ
華麗なとぼりの中、（玉眞の魂は）夢からはつと目覚めた

てん しょうぞく そそうせい ほう
侍女の小玉に伝言をして（側仕えの）双成に来意を知らせる

転じて小玉をして双成に報ぜしむ

きゅう かちようり むちゅうおどろ
華麗なとぼりの中、（玉眞の魂は）夢からはつと目覚めた

九華帳裏夢中驚く

しゅはくぎんべいり い ひら
珠箔銀屏遷遁として開く

美しい冠もきちんと整えず広間を降りてくる

かかんとの どう くだ き
花冠整へず堂を下り來たる

まるで霓裳羽衣の舞のようである

な げいしよう まい に
猶ほ霓裳羽衣の舞に似たり

長恨歌（第四部）七五句～一二〇句）▽書き下し文◆口語訳

九九句～一二〇句 Ver.1

赤シートを使って暗記・確認用に利用して下さい。

※各傍線は 重要漢字・表現 重要 句形 を表す※

美しい顔は寂しげで涙がとめどなく流れる

玉容寂寞涙欄干

思いをこめ、瞳をこらして天子にご挨拶申し上げる

昭陽殿でいただいたご寵愛は断ち切られ

情を含み睇を凝らして君王に謝す

昭陽殿裏恩愛絶え

振り返つて下の人間世界眺めると

頭を廻らして下のかた人寰を望む処

ただ思い出の品によつて深い真心を表し

唯だ旧物を将つて深情を表し

二股のかんざしは一方を残し箱もふたと身の一方を残します

釵は一股を留め合は一扇

ただ（私たちの）心を黄金やらんのよつてに堅くしておけば

但だ心をして金鉢の堅きに似しめば

（使者との）別れにあたつて丁寧にもう一度伝言を託す

別れに臨んで殷勤に重ねて詞を寄す

「七月七日、長生殿

天にあつては、どうか比翼の鳥となり

天に在りては願はくは比翼の鳥と作り

天地は永遠に存在するといつてもいつか滅びる時もあるうが

天長地久時有りて尽くとも

※読解に際して注意すべき点等※

・「梨花一枝春帶雨」、「梨の花」は中国では最上の花。これを自著の中で引用したのは清少納言。「木の花は」（三七段）参照。

・楊貴妃の手紙の内容を示す句はどこからどこまでか。最初と最後の五字を抜き出せ」とかいかも聞かれそう。

・あくまでも楊貴妃（の魂）に会つてゐるのは方士（＝使者）であつて玄宗皇帝ではない点に注意。楊貴妃と方士とのやりとり。

・作者名 作品名等は漢字で正確に答えられるようにする。「白居易（白楽天）」作「白氏文集」の「長恨歌」。最後一句でブチギレてる。

・あと押韻と対句も押さえとく。

※慌てて作ったのでミスが含まれていると思われますがご了承ください。

一枝の梨の花が、春の雨に濡れているかのようだ

梨花一枝春雨を帶ぶ

「お別れして以来、お声もお姿もどちらも遠くぼんやりしておりました

一別音容両つながら眇茫

蓬莱宮で長い月日を送りました

蓬莱宮 中日月長し

長安の都は見えず、塵や靄が見えるばかりです

長安を見ずして塵霧を見る

らでん細工の箱と金のかんざしをことづけて持ち歸らせる」としましよう

鉢合金釵寄せ將て去らしむ

かんざしは黄金を引きちぎり、箱はらでんの模様を分かちました

釵は黄金を撃き合は鉢を分かつ

天上と人間界に別れていても必ず会えるでしょう」と

天上人間会はず相見んど

その言葉の中には一人しか知らない誓いがあつた

詞中に誓ひ有り両心のみ知る

夜中に入影もなくなつて一人ひそかに語り合つたとき

夜半人無く私語の時

地上にあつては、どうか連理の枝となりましょう」と

地に在りては願はくは連理の枝と為らんと

この恨みはどこまでも続いて尽きる時はないだらう

此の恨みは綿綿として尽くる期無からん

(おまけ) 長恨歌(一~六句) 押韻 対句

連続する同一の色が同一の韻。例えば「国」→「色」までが「oku」の韻。対句は見ての通り

漢皇重色思傾國

御宇多年求不得

楊家有女初長成

養在深閨人未識

天生麗質難自棄

一朝選在君王側

迴眸一笑百媚生

六宮粉熏無顏色

春寒賜浴華清池

溫泉水滑洗凝脂

侍兒扶起嬌無力

始是新承恩沢時

雲鬢花顏金步搖

芙蓉帳暖度春宵

春宵苦短日高起

從此君王不早朝

承歡侍宴無閑暇

春從春遊夜專夜

後宮佳麗三千人

三千寵愛在一身

金屋粧成嬌侍夜

玉樓宴罷醉和春

姊妹弟兄皆列土

可憐光彩生門戶

遂令天下父母心

不重生男重產女



長恨歌（二七〇一二〇句）▽押韻◆對句

第二部（二七〇五四句）

連續同色同韻

矢印上下對句。

驪宮高處入青雲

仙樂風飄处处聞

緩歌漫舞凝絲竹

尽日君王看不足

漁陽鼙鼓動地來

驚破霓裳羽衣曲

九重城闕煙塵生

千乘萬騎西南行

翠華搖搖行復止

西出都門百余里

六軍不發無奈何

宛轉蛾眉馬前死

花鋗委地無人收

翠翹金雀玉搔頭

君王掩面救不得

迴看血淚相和流

黃埃散漫風蕭索

雲棧縈紲登劍閣

峨嵋山下少人行

旌旗無光日色薄

蜀江水碧蜀山青

聖主朝朝暮暮情

行宮見月傷心色

夜雨聞鈴腸斷聲

天旋日轉回龍馭

到此躊躇不能去

馬嵬坡下泥土中

不見玉顏空死處

第三部（五五〇七四句）

君臣相顧盡霑衣

東望都門信馬歸

婦來池苑皆依舊

太液芙蓉未央柳

芙蓉如面柳如眉

對此如何不淚垂

春風桃李花開夜

秋雨梧桐葉落時

西宮南苑多秋草

宮葉滿階紅不掃

梨園弟子白髮新

椒房阿監青娥老

夕殿螢飛思悄然

孤燈挑盡未成眠

遲遲鐘鼓初長夜

耿耿星河欲曙天

鶯鶯瓦冷霜華重

翡翠衾寒誰與共

悠悠生死別經年

魂魄不會來入夢

第一部（七五〇一二〇句）

臨邛道士鴻都客

能以精誠致魂魄

為感君王展転思

遂教方士殷勤覓

排空馭氣奔如電

昇天入地求之遍

上窮碧落下黃泉

兩處茫茫皆不見

忽聞海上有仙山

山在虛無縹渺間

樓閣玲瓏五雲起

其中綽約多仙子

中有一人字玉真

雪膚花貌參差是

金闕西廂叩玉扃

転教小玉報双成

聞道漢家天子使

九華帳裏夢中驚

攬衣推枕起徘徊

珠箔銀屏遙迤開

雲鬢半垂新睡覺

花冠不整下堂來

風吹仙袂飄飄舉

猶似霓裳羽衣舞

玉容寂寞淚欄干

梨花一枝春帶雨

含情凝睇謝君王

一別音容兩渺茫

昭陽殿裏恩愛絕

蓬萊宮中日月長

迴頭下望人寰處

不見長安見塵霧

唯將旧物表深情

鈿合金釵寄將去

但令心似金鑄堅

天上人間會相見

釵留一股合一扇

釵璧黃金合分鑄

臨別殷勤重寄詞

詞中有誓兩心知

七月七日長生殿

夜半無人私語時

在天願作比翼鳥

在地願為連理枝

天長地久有時盡

此恨綿綿無定期